

森の迷い子羊



暗い森の中に、ある日一匹の子羊が迷い込んでしまいました。

その森の奥深くにある洞窟には、恐ろしいものがある事を、子羊は小さいながらも知っていました。

「早く出なきゃ・・・!」

それから何年かさまよいつけた子羊は、森の妖精に出会いました。「貴女がここから出られる様、手伝ってあげる。その代わり、暖かい泉の水は、飲んではいけないよ。」

子羊は頷きました。

「解った。絶対に飲まないって、約束する。」

それから数十年、月日が流れ、ある時から、あの妖精が姿を消してしまいました。

「何処に行っちゃったか分からないけど、とにかく進まなきゃ!」

子羊は一生懸命歩きました。

すると、湯気が立ち上る、黄色い泉に辿り付きました。

「わぁ・・・なんて素敵なんだろう!!」

子羊は少し浸かってみました。

すると、今まで歩いてきた時にしてしまった怪我が、みるみるうちに治っていきました。

感動するやいなや、子羊はもう一つの青い泉を見つけました。

沢山の動物達が、水を飲みに来ていました。

「そういえば、ずっとお水を飲んでなかったな・・・少しだけ、私も良いかな?」

目を覚ました子羊は、周りを見渡しました。

「此処は何処だろう? 私はどうしちゃったんだろう?」

あの森よりも、暗い場所でした。先が見えません。

「怖いよ・・・」

子羊は一気に駆け出しました。

このまま走っていれば、その先にきっと何かがある。

そう信じて。。

すると、走っていったその先には、愛する家族がいたのです。

「お母さん!お父さん!私————!!」

次の瞬間、笑顔の家族が、突然姿を消したのです。

「お父さん?お母さん?」

呼んでも呼んでも、返事は返ってきませんでした。子羊は歩き出しました。「諦めちゃダメだ。

頑張らなきゃ。家族のところに帰らなきゃ。」

森に迷ってから何十年、

今だに森から抜けられない子羊は、絶望の淵にありました。もうこのまま帰れないんじゃないか
もうこのまま倒れてしまうんじゃないか

もうこのまま死んでしまうんじゃないか

もういっそのこと このまま死んでしまおうか 子羊は、崖の上に登りました。下には広大な川、上には綺麗な星空。子羊は————

「まだだめだよ！」

子羊が傾いたその瞬間、何かが子羊を引っ張りました。

「まだダメだよ！」

それは、あの妖精でした。

「あの時、突然いなくなっておめんね？ 実は、洞窟の主に操られて————でも大丈夫!! 今は平気だから!!! それにしても・・・君はあの泉の水を飲んでしまった様だね。もう簡単には元の世界には戻れないよ。けどいい？ 絶対に死んではいけない。魔王に負けてはいけないよ。」

それから2ヶ月が経ち、子羊はおかしくなってしまうそうでした。

「もう限界。もう無理。私には耐えられないよ・・・っ」

そんな風になってから1ヶ月が経とうとする頃、

子羊は子羊を見付けました。

するとその子羊は言いました。

「俺は君を助けに来たんだ。さあ、一緒に元の世界へ帰ろう。」

この話はノンフィクションであり

フィクションである。

途中で気付いた事があったのならば、この物語を

貴方の手で

書き換えて頂きたい。

それが私にとって嬉しい結末であることを、期待しています。